

悼みの列島 日本を語り伝える 第8回

読谷、摩文仁で考えた、 沖縄戦のこと。

室田元美

二十数万人の犠牲者を出した沖縄戦から、73年。

米軍が上陸した読谷村よみたんぞんを訪ねた。

戦争末期、米軍の本土上陸を少しでも遅らせるために、捨て石とされた沖縄。10代の少年少女から60代の男性までが「根こそぎ動員」で戦場へかり出され、軍民の「共生共死」が求められた。

壮絶な戦争だったと伝えられるが、過去のことなのか。

そこから学ぶべきことは何だろうか。

本土から沖縄を考えることはもちろんだが、

沖縄から今を見る、日本を見る、世界を見ることも必要ではないだろうか。



むろたもとみ●ライター。1960年兵庫県神戸市生まれ。戦争の記憶を伝えること、東アジアの平和のための交流をテーマに執筆。著書に『ルポ 悼みの列島 あの日、日本のどこかで』（社会評論社）、『いま、話したいこと～東アジアの若者たちの歴史対話と交流～』（子どもの未来社）、共著に『2015→1945 若者から若者への手紙』（ころから）。